

日本母性看護学会ニュースレター

The Japan Academy of Maternity Nursing Newsletter No.7

発行 日本母性看護学会 事務局:〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34 京都橘大学看護学部内 TEL&FAX (075)574-4257・574-4261

ラインアップ: 第7回日本母性看護学会学術集会報告 (埼玉県立大学 渡辺尚子)

看保連ができました (自治医科大学 成田 伸)

特集 ICM ブリスベン大会 (長野県看護大学 赤羽洋子 ほか)

第7回 日本母性看護学会学術集会報告

第7回日本母性看護学会

学術集会長 渡部尚子 (埼玉県立大学)

第7回日本母性看護学会学術集会は、平成17年6月12日(日)、178名の参加者を迎え無事終了致しました。この会をさまざまな形でご支援ご協力下さいました多くの皆様に心から感謝申し上げます。会場および宿泊場所等の制約から今大会の開催は一日だけとなり、そのため遠方からのご参加の皆様には少なからずご迷惑をお掛けいたしました。その点につきましてはお詫びする次第です。

今回の学術集会では、“セクシュアリティ”をキーワードにいたしました。ご存じの様に、この用語や概念は1964年に創設されたSIECUSの提言に始まり、わが国でも80年代中頃から看護文献で散見されるようになりました。特に90年代前半に、一連の国際会議で「性と生殖の健康と権利」が合意・採択されてからは看護・助産界でも積極的に取り上げられるようになりましたが、今学会では、この10余年における研究・実践等を母性看護の視点から問い・見直すことを意図しました。

前原理事長のご講演は、母性の社会的地位や認識のされ方を歴史的視座から紐解き、母性として、人間(女性)として認められるようになった現在においてなお育児不能や児童虐待・少子化が惹起するのは何故か、その問題を提起された内容でした。また、ラブピースクラブ代表北原みのりさんの「普通に語る女性の性」については、看護・助産界にいる私たちが、「女性の下」のことを「フツー」に語り、対象者の抱えるその問題を本当に共有していますか、



渡部尚子 第7回学術集会長



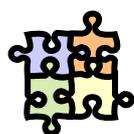
ワークショップの風景

ということ突きつけられた様なお講演でした。3つのワークショップでは、今学会のキーワードを反映した「セクシュアリティを大切にした母性看護」・「看護職としてDV被害の当事者支援でできること」の2つと、平成17年度に新しく始まった助産師卒後研修を視野に入れた「助産師の卒後教育の現状と課題」が開催されました。また一般演題では、6つの群で計23題の発表がありました。いずれの会場においても活発な討議が行われています。本学会は会員300名弱による小さな学会ですが、年々学術集会も充実し研究発表等も質の高いものになってきております。学会のますますの発展を期待してやみません。



北原みのり氏（左側）をお迎えしての懇親会

次年度「第8回日本母性看護学会各術集会」は福井県（学会長：福井大学 田邊美智子先生）での開催となります。詳しい内容は学会HP (<http://www.mcn.ac.jp/bosei/>)にてご案内しています。



看保連が設立しました！

渉外・広報担当理事 成田 伸

平成17年7月25日（月）看護系学会等社会保険連合（「看保連」と略称します）の設立総会が日本看護協会 JNA ホールにおいて開催され、審議の末、設立しました。看保連は、「国民の健康の向上に寄与するために、科学的・学術的根拠に基づいて、看護の立場からわが国の社会保険の在り方を提言し、診療報酬体系および介護報酬体系等の評価・充実・適正化を促進することを目的」としています。

診療報酬や訪問看護療養費等については中央社会保険医療協議会（中医協）が審議しています。中医協には、専門委員の看護担当として日看協の岡谷専務理事が、また診療報酬調査専門組織・医療技術評価分科会委員として野末聖香氏（慶應大教授）が入っていますが、もっとも中心となる委員には看護職は入っていません。また、医学系の領域では以前から、医学系学術団体が連合し、

社会保険診療報酬改定時に中医協に対して評価対象希望書を提出する団体として、それぞれの領域のエビデンスを持って意見を述べる、外保連（外科系学会社会保険委員会連合）・内保連（内科系学会社会保険委員会連合）が存在していました。看護系では、かろうじて日看協の看護学会が入っているのみで、力としては弱いものがありました。そこで、外保連・内保連のように看護系学会等の学術団体が連合し、要望を出す根拠となるエビデンスを強力的に収集し、まとめ、主張していく組織が必要であるとして、本年5月12日に第1回会議が開催され、今回設立に至りました。

看保連は、日本看護系学会協議会に参加している26学会、看護部長会議・団体として13団体が参加しています。看保連の活動は参加団体の拠出金によって支えられる予定です。本学会含めまだ会員数がそれほど多くない団体もあり、団体毎の拠出金の額については今後も検討

を続ける予定で、まだ確定しておりません。また予算案や活動の詳細についても今後の検討課題として残っております。設立総会において承認された役員は、代表（1名）：井部俊子氏（日本看護管理学会）、副代表（2名）：栄木実枝氏（全国国立大学病院看護部長会議）、紙屋克子（日本看護研究学会）、幹事（2名）：竹内幸枝氏（赤十字医療施設看護部会）、佐藤エキ子氏（聖路加看護学会）、看護技術検討委員長：野末聖香氏（日本看護科学学会）、診療報酬および介護報酬体系の在り方に関する検討委員長：岡谷恵子氏（日本看護学会）の方々です。母性看護学会は日本看護系学会協議会の一組織として参加することを、今回の看保連設立に先立つ平成17年度の総会において承認しています。また理事会において、渉外広報担当理事が委員として参加することが決まっております。設立までの会議には北海道医療大学の齋藤いずみ氏に、設立総会には岡部恵子理事（つくば国際短期大学看護学）にご出席いただきました（今後は渉外広報担当理事の成田が出席の予定です）。設立総会では基調講演として厚生労働省保健局医療課保健医療企画調査室長の堀江裕氏が「社会保険診療報酬改定の動向と今後の展望」のご講演をされました。「混合診療」と「中医協改革」が大きな社会問題として取り上げられ、特に「混合診療」と看護の絡みでは、「医師、看護師等の手厚い配置」があり、手厚い配置が保険外負担となった場合に、お金のある人、ない人の間に看護の差が出る不安などがある等のお話がありました。

まだ不確定の部分の多い看保連ではありますが、平成18年度の診療報酬改定の際へのエビデンスを伴った意見の取りまとめに向け、今後積極的に活動を展開していくものと思われまふ。日本母性看護学会としても、看保連に対して委員として参加するのみならず、本学会からのエビデンスが意見書に添付されるように、会員の総力をかけて、協力していきたいと思っております。皆様のご協力よろしくお願ひします。



特集 ICM ブリスベン大会

去る7月24日から28日かけて、オーストラリア・ブリスベンにてICMブリスベン大会が開催されました。日本からも200名を超える参加者があり、本学からも多くの方々に参加されました。学术交流もさることながら、会場の内外で様々なかたちでの文化的人的交流が繰り広げられました。今回は参加なさった学会員の方々のレポートを特集でご紹介します。

ICMに参加して

長野県看護大学 赤羽洋子

2005年7月24日～28日にブリスベンで27th Congress International Confederation of Midwives（以下ICM）が開催されました。出発日、千葉を中心とした地震の影響で、私たちの乗っていた電車が止まってしまうというハプニングに巻き込まれ、空港に着いたのは、フライト時間を過ぎてからでしたが、何とか飛行機に乗れました。出発から珍道中だったことは、いうまでもありません。

到着した日の夕方から、Opening Ceremonyがあり、浴衣で参加しました。助産師というだけで、皆との一体感を感じ、握手にHUGにといったことが絶えませんでした。翌日からは、朝一で基調講演を聞き、その後各セッションに分かれて発表を聞いてまわりました。行く会場のほとんどが、たくさんの助産師たちであふれ、立ち見が出る会場ばかりでした。そんな中で、私も辞書を引きながら勉強してきました。ICMに参加して、毎日の息抜きになっていたのが、“morning tea”と“afternoon tea”の時間です。オーストラリアはイギリス文化の影響を受けているので、tea timeが必ずあるとのこと。毎日、スコーンやクッキーといったおやつが出てきて、英語漬けで頭がボーっとなってしまう私には癒しのひと時でした。ただボーっとしていても、他の国の方とお話しをすることもしばしばあり、本当に脳を休めていたかはギモンです。今回ICMに参加して感

じたことは、すべての助産師たちは、世界中のすべての女性が、心身ともに健康で生き生きと生活することを願い、それを実現するために、何かしらのお手伝いをしているというところです。活躍・活動の場は皆それぞれ異なりますが、目指すものが同じで、同じ職業というだけで、熱く語れる集団があるというのはとてもいいことだと思います。また、私自身そのことを実感でき、貴重な経験となりました。次回は2008年、スコットランド・グラスゴーです。皆様参加されてみてはいかがでしょうか。



Opening Ceremonyにて

ICMでの経験

千葉大学大学院博士課程 中村康香

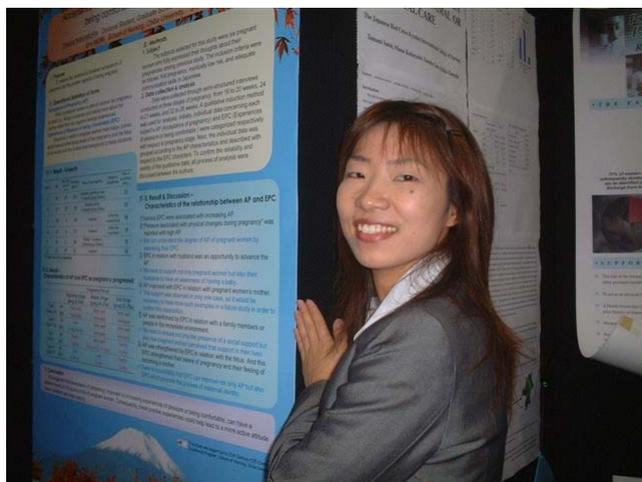
今回初めてICMに参加をしましたが、見るもの、聞くものすべてが新鮮で、とても刺激的なものでした。大会全体の雰囲気としては、国際色が豊かであり、また、当然のごとく全員助産師であり、なんだかとても圧倒されると同時に、力強さも感じました（みんなお揃いのオレンジのコングレスバッグを持っているのも・・・）。私はポスター発表をする機会がもてました。会場は、ティータイムやランチが楽しめる会場と、ポスター展示会場、各メーカーや組織の展示ブースが、すべて同じ会場であり、お茶をしながらポスターやブースを見て回れるようになっていました。そのため、休憩時には、自然とその場に人が集まり、意見をかわす様子が見られました。この、ティータイム（10時と15時）を大事にしているところが、国際学会だなあと実感させられるところで、上手に息抜きをしながら、学会を楽しむコツだと思います。

た。一般演題では、いつも読んでいる海外論文の世界が目の前に広がっているという感じで、英語を聞き取るので精一杯でした。病院や地域が取り組んでいる活動や、また質的研究もかなり多くみられ、共感できる部分や、日本との相違など、かなり勉強になりました。その中の1つに、若年妊婦を対象にしたグループでの継続的な出産前教育の取り組みがあったのですが、その出産前教育をプログラム化、商標登録し、研究によってその効果を示していました。そのプログラム自体は、日本の出産前教育ととても似たところがあり、共感もてるものでしたが、プログラムを商標登録していることに驚かされました。看護研究における知的財産やその所有権、周知・活用方法ということについて考えさせられる機会となりました。

国際学会は英語がどうも苦手・・・と二の足を踏みがちですが、私は、国際学会に行くことによって、自分の看護や研究の視野が大きく広がりました。是非皆様も2008年グラスゴー（イギリス）へ!!



多くの人で賑わう示説会場



オーストラリアの助産施設

—見学ツアーに参加して—

自治医科大学 岡本美香子

参加した看護協会主催の Mater Mother's Hospital 見学のご報告をします。Mother's Hospital は私費 69 床、公費 40 床で、年間 8,000 件の分娩を扱い、南半球で最大だそうです。私費入院産婦の平均年齢は 38 歳で第一子が多く、そのため帝王切開率も私費で 50%、公費で 43%と高めです。また無痛分娩が主流で、その数は経膈分娩される産婦の 65%で上昇傾向、というところで、医療介入が多いことがわかります。基本的にはお産には、無痛分娩の際に麻酔科医が麻酔する以外は助産師がケアにあたります。

ブリスベンがあるクィーンズランド州では、助産師が行えるケアの範疇は卒後教育のレベルによって分けられるとのことでした。オーストラリアにおいては医療介入が多いお産が多いことや、産科医が常に分娩に立ち会うわけではない状況から、卒後の教育がとても重要になっていました。

Mother's Hospital は、理学療法士や男性助産師も協力して出産前教育にも力を入れていました。日本でも出産前教育に医師や栄養士など他職種が参加することもあります。理学療法士というのは少々驚きました。妊婦体操の指導が苦手だった私としてはとても良い協力者だと思いました。Mother's Hospital の出産前教育で大切にしていることは、①continuity (2 人の助産師が一緒に働き継続してケアに当たる。)、②accessibility (家庭訪問や助産師のクリニックを地域に作る。)、③responsive to community needs (妊婦や地域の要望を取り入れる。)とのことでした。

出産前教育の中で、特色のある 3 種類の母親学級について説明します。第一は、19 歳以下の妊婦対象のクラスです。19 歳以下の妊婦はパートナーがいても結婚していないことが多く、このカップルを対象に、助産師やソーシャルワーカーが妊娠・出産・育児についての指導をしています。その結果、2003 年では、このクラスを受けた妊婦の帝王切開率は 12%と低い結果になったそう

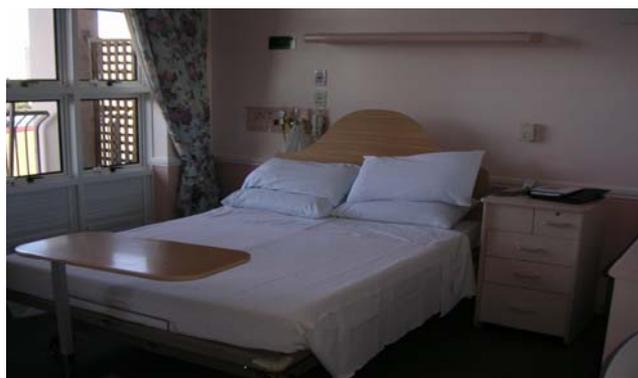
です。第二は CHAMP で、薬物やアルコール依存症の妊婦を対象としたものです。

妊娠がわかると、全ての女性にアルコールと薬物に関するアセスメントをし、そこで依存症であることが判明した場合、専門クリニックへの紹介を行い、禁酒や薬物をやめるための支援を行います。約 25%の妊婦は禁酒できないまま出産となります。産後、アルコールや薬物依存が続く場合でもなるべく母乳育児をするように支援します。もし薬物やアルコールを摂取する場合は、飲酒後 2 時間、薬物摂取後 24 時間は授乳しないようする、飲酒や薬物摂取の予定がある場合には搾乳冷凍するなどの指導をするそうです (!)。第三にアボリジニーの妊婦を対象にしたクラスです。彼らは健康面、社会面で特殊で、白人のいる場所へなかなか出て来ないので、居住する地域に出向き、生活に即した指導を行っているとのことでした。

Mother's Hospital の出産前教育の 3 つの方針が生きた対象を尊重したクラスでした。日本では、父親や家族も対象とした出産前教育のクラスがやっと増えてきたところですが、不妊症だった妊婦や外国人妊婦などといった対象を特定した、ニーズに合わせたクラスも必要なのかなと思いました。最後に Mother's Hospital の入院費用についてお話をします。公費の場合は当然無料です。いっぽう私費の場合は、経膈分娩で 3 日入院したケースで 320AUS\$ + 薬剤などの使用料です。もし総合医 (GP) の立会う希望する場合は追加で 250AUS\$が必要だときいて、びっくりしてしまいました。どの国でも医師の診療は高いものなのですね。

Mater Mother's Hospital のHP

<http://www.mater.org.au/default.asp>



看護学部、病院、育児支援施設見学ツアー

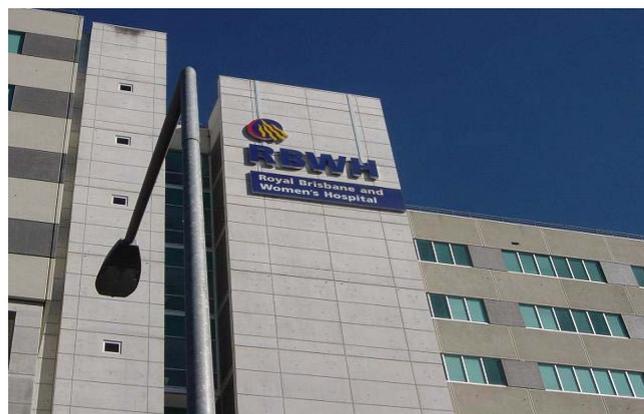
長野県看護大学 黒田裕子

私たちは、クィーンズランド工科大学(Queensland University of Technology、以下 QUT)の看護学部見学、病院見学(Royal Brisbane Women's Hospital Birth center and Maternity ward)育児支援施設見学(Early Feeding Support Clinic)の機会を得ることができましたので簡単ですが紹介します。まず、初日ですが QUT 学内小会議室にて、オーストラリアの看護教育や児童虐待についての取り組みの講義を伺いました。オーストラリアでは、1984 年から大学教育になったとのこと。英国とおなじく大学教育は 3 年です。助産師資格取得には更にもう一年かかります。オーストラリアの助産師は看護職の中で 0.9%だそうで、日本とそんなに比率は変わりません。オーストラリアでは看護師の高齢化が問題になっています。現在看護職の平均年齢は 42.2 才。若い人は海外、特に英国に多く働きに行っています。原因のひとつは給料が安いこと。初年度 500 万円ぐらいなのですが、イギリスに行けば飛行機代は出してくれるし、給料もよいとのこと。代わりにアジアから働きに来ているそうで、日本からも是非勉強にきてほしいと誘われました。オーストラリアでは、看護資格は終身ではありません。5年に一度申告が必要です。更新料は A\$ 72 ドル日本円で 6500 円ぐらい。再登録、再教育は 6 ヶ月で A\$ 1000 ドルかかるとのことですから、申告漏れをしたら大変です。



School of Nursing, QUT 正門

次の日は、Royal Brisbane Women's Hospital Birth center and Maternity ward を見学しました。クィーンズランド州でのお産はほとんどここで行われます。年間5000件という数をこなしています。そのうちの約450件を Birth center で分娩を取り扱っています。そこは家族が食事を作ったりできるキッチンがあったり、水中出産の写真など写真が廊下に貼ってありアットホームな感じ。分娩室は 5 部屋あるのですが、あいにく見学の日はいっぱいで中まで見ることができず残念でした。医師が中心で取り扱う分娩室は 10 室あって、そちらのブースでも分娩台の上で必ずお産しなければならないわけではなく、好きなように立っても座ってもお産してよいと話されていました。医師が中心といっても、異常がなければこちらも助産師だけで分娩を取り扱うことが多いそうです。病院全体では、助産師は 120 人ぐらいで、30%が無痛分娩で、C/S 率は28%。本当に帝王切開が必要な人は14%で、あとの14%は希望の帝王切開だそうです。正常産は半分以下ということになります。産褥入院は 3-4 日で、退院後5回ぐらい病棟の助産師が家庭訪問に行くとのこと。この広いクィーンズランド州でどうやって家庭訪問をしているのでしょうか。スタッフはいそがしそうでもとても早口でしたので、遠慮して聞けませんでした。この病院は一階と二階が吹き抜けになっており、広くてきれいです。フードコートがあっておいしいカレーをいただきました。



Royal Brisbane and Women's Hospital

最後の日は Child Health Service、Early Feeding Support Clinic を訪問しました。若い両親に子育てを指導する施設です。実はこのクリニックに行くのに随

分道に迷ったのですが、近くの人に聞いても、知らないという返事をするのです。虐待や、DVに関わる施設であるという関係で、所在を公にしていない感じでした。普通の住宅街に普通に建っていました。ここは、母親と子どもだけでも入所できますし、両親と子どもとで入所することもできます。子どもとの遊び方、寝かしつける方法、離乳食の作り方、入浴方法を2週間ぐらいかけてトレーニングします。オーストラリアでは、10代の夫婦が21%とのことでした。全行程で10日間ほどの滞在でしたが、カフェなどは夕方4時ぐらいには店じまいをはじめ、5時にはみんな自宅に帰ってしまいます。オーストラリア人は、必要なだけ働いてあとは自分のために時間を使うのだそうです。日本人は長時間忙しく働いて、うつ症状の人が急激に増えて問題になっています。オーストラリアをもう少し見習ったほうがいいのかもかもしれません。

事務局だより

1) 学会事務局の移転について

日本母性看護学会事務局がH17年7月より移転いたしました。新事務局は、京都橘大学看護学部内となります。新設の京都橘大学看護学部に学会事務をおまかせ頂き、スタッフは引き継いだ書類や荷物に学会の歩みと学会を支える事務局の重みを感じています。まだまだ慣れないことが多く、会員の皆様にはご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、精一杯努めさせていただきたいと思っております。皆様の母心にてのご助言をいただければと思っております。どうぞよろしく願いいたします。なお、学会の問合せ用メールアドレスはこれまでと同じですが、連絡先住所・電話番号は変更となっておりますので、お間違えのないようお願いいたします。

平成17年10月12日現在、本学会員数は300名となっております。

2) 総会報告

第7回学術集會に合わせて、159名の出席(委任状を含む)を得て総会が開催されました。各会務

報告とともに、平成17年度の事業計画案と予算案が賛成多数で了承されました。また、総会に先立ち行われた選挙により新理事が選出されたことが報告され、拍手で承認されました。新理事長には次の新理事会で前原澄子氏が選出され、承認されました。なお、新理事の方々については学会HPにてご紹介しています。

3) 第8回日本母性看護学会学術集會のご案内

平成18年6月19日(土)～20日(日)田邊美智子会長(福井大学)のもと、第8回日本母性看護学会学術集會が開催されます。芦原温泉に浸かりながら、日ごろの疲れをお湯に流し、皆様と有意義な時間を過ごしたいと思っております。皆様のご参加をお待ちしております。日本母性看護学会ホームページ<http://www.mcn.ac.jp/bosei/>をご覧ください。

4) 日本看護系学会協議会について

平成17年9月26日日本看護系学会協議会が開催され、前原理事長が出席されました。協議会では役員選出規程が決議され、今回の選挙管理委員会は、高知女子大看護学会・日本家族看護学会・日本看護技術学会の3学会が選出されました。

5) 住所変更等について

ご住所および所属先などが変更となりましたら、事務局までご連絡ください。郵便物が宛先不明で戻ってくる場合があります。学会誌やその他のお知らせを確実にお届けするために、郵便物送付先など速やかに変更届けを事務局にご提出ください。日本母性看護学会HPから住所変更などの連絡用紙をダウンロードすることができます。入会申込書も同様にダウンロードできますので、ご利用ください。(事務局：竹 明美)

発行人：前原澄子
 発行日：2005年10月20日
 編集担当者：成田 伸、遠藤俊子、村本淳子
 岡本美香子、二村良子、跡上富美
 発行所：日本母性看護学会
 事務局：〒607-8175
 京都府京都市山科区大宅山田町34
 京都橘大学 看護学部内
 TEL・FAX (075) 574-4257・574-4261
 URL <http://www.mcm.ac.jp/bosei/>